

狂
え
る
愛
に



溺
れ
て

養護施設を出て新しい生活を始めて間もない頃、祖父の訃報を知らせる一通の手紙が届いた。

手紙には訃報と共に祖父の遺産相続の手続きの為に、祖父が暮らしていた館までお越しいただきたいと書かれていた。

祖父と両親は仲が悪く、僕が幼い頃から絶縁状態だった。僕が祖父について知っているのは、日本人ではないと言う事と日本から遠く離れた国に住んでいる事くらいだった。



飛行機や列車、バスなどを乗り継ぎ辿り着いた農村から、さらに山道を歩くこと数時間。数日掛かりでようやく到着した館の玄関の前には、一人の女性がいて僕を出迎えてくれた。



「ようこそお越しくださいました。深田ハルキ様ですね？
私は旦那様の…ハルキ様のお祖父様の身の回りの
お世話をしておりましたアヤカと申します。」

「長い旅で大変お疲れでしょう。お食事とお部屋をご用意しております。」

「相続に関する事は専門家の方をお呼びして明日、改めてお話させていただきます。」

「は……は……」

僕は彼女のまるで人形の様な肌や瞳に思わず、息を呑んだ。

「えっと……アヤカさんは……」

アヤカさんは僕の疑問を察して「母が日本人なんです。」と答えて短く微笑んだ。

アヤカさんに案内されるままに館に足を踏み入れると、まず最初に感じたのは今までに嗅いだ事のない異臭だった……

ゆっくり玄関が閉じられる音がする。玄関から漏れる僅かな光だけが足元を照らしていた。

「あの……ちょっと暗いですね。」

「申し訳ございません……。今、明かりをお付けいたします……」

「!?」

すると突然、背後から首に何かを打ち込まれ

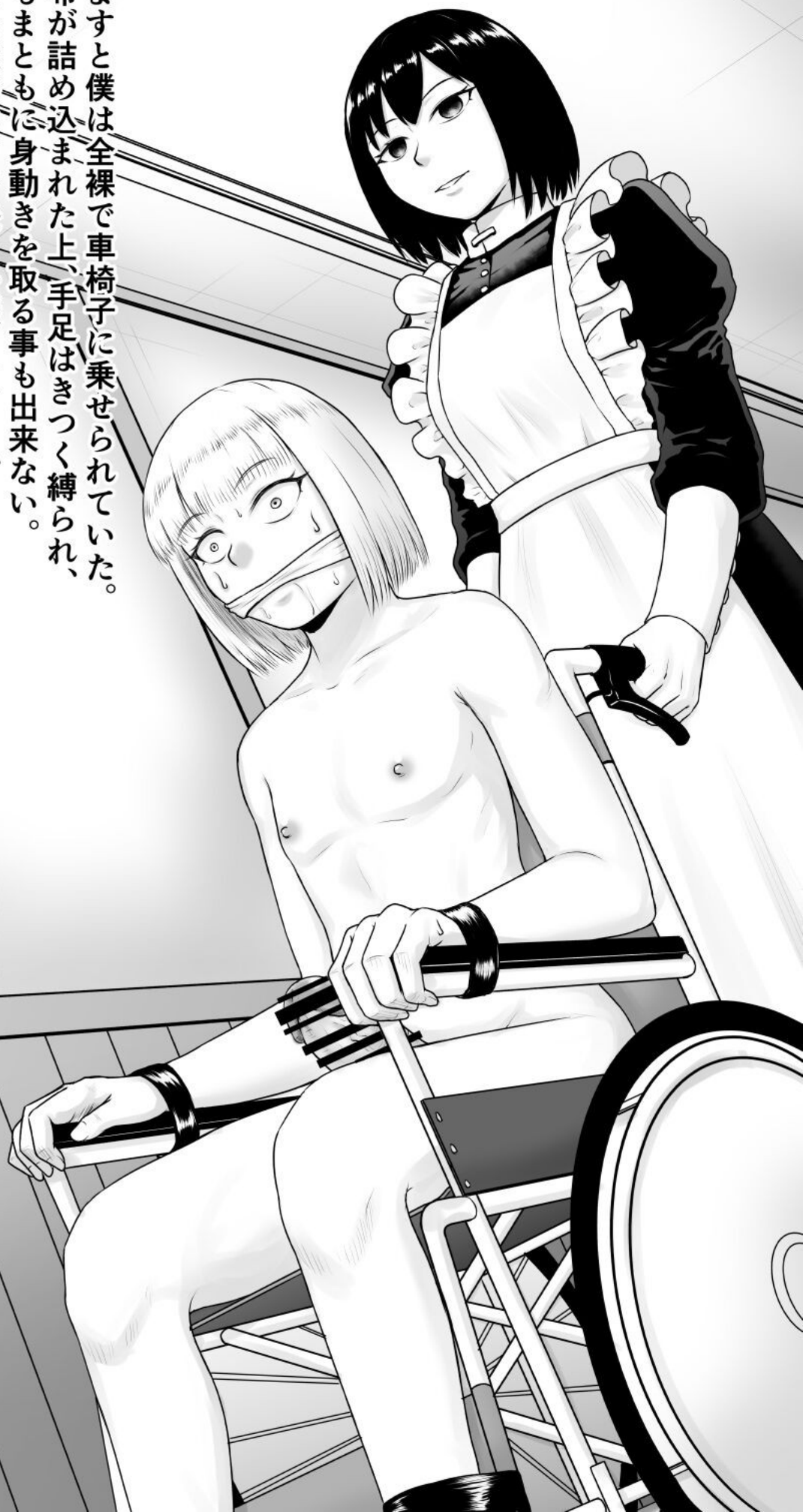
僕はそのまま意識を失った……

目を覚ますと僕は全裸で車椅子に乗せられていた。口には布が詰め込まれた上、手足はきつく縛られ、喋る事もまともに身動きを取る事も出来ない。唯一自由な状態の首で後ろを振り向くと、アヤカさんが玄関で出会った時と全く変わらない表情で車椅子を押していた。

「お目覚めになられましたか？
これから、この館の『新しい旦那様』になれる
ハルキ様に旦那様が遺した素晴らしい遺産の数々を、
ご紹介させていただきます。
最初は刺激が強く感じられるかもしれませんが、
きつと気に入っていただけるはずです。」

状況が全く飲み込めないでいると僕は自分の体の異変に気付いた。僕の性器が自分でも見た事がない程に膨張していた。

「亡くなられた旦那様も使用していた薬をハルキ様の体型に合わせて調整し、注射しました。やはり血が繋がっているのですね。旦那様によく似た素晴らしいモノをお持ちです。」アヤカさんは僕の性器を見つめながら微笑んでいた。



車椅子を押されながら廊下を進んでいると、廊下の奥から何かが声を上げて近付いてくる。最初、犬が近付いてきてるのだと思ったが違った。僕の目の前に現れたのは首輪をした手足のない少女だった…。

『あー！あー！
あうあー！』

言葉が喋れないのか、少女は奇声を上げながら僕を満面の笑みで見つめてくる。

『あー！あう！
あー！あー！
あー！あー！』

「この子はアリスと言います。旦那様もとても可愛がっておられました。アリス、この方は『新しい旦那様』のハルキ様です。旦那様は亡くなるまで毎日、アリスを使っていました。この子も久しぶりに使って欲しいのでしよう。是非、ハルキ様もアリスを使ってあげてください。」
使って…？使っていたって…まさか…？
アヤカさんは少女をゆっくりと持ち上げた…。

アヤカさんは持ち上げた少女の性器を僕の性器に挿し込む形でゆっくり下ろしていく。
ぬるぬるになっていく少女の性器に、硬くなった僕の性器が奥深くまで入り込んでいく。

『あー!! あっ!! あうあーっ!!』

少女は嬌声を上げながら、
僕の上で欲望のままに腰を
動かす。

『あぶうーっ!! あうー!!
あひいつ!! あっあっあーっ!!』

僕は初めての快感に抗えず、自分よりもずっと
年下であろう少女の膣内に何度も射精した。
想像もしていなかった形で僕は童貞を喪失した…。



「館に『新しい旦那様』がお見えになりました。
ご奉仕しなさい。」

『はい…。
ご奉仕をさせて
いただきます。』

アヤカさんはこの国の言語で女性に話し掛けると、
女性には短く返事をして声の方向を探るように
僕の方へとにじり寄ってきた。



アヤカさんは僕が射精したのを確認すると、少女を下ろし再び車椅子を押し始めた。
息を切らして恍惚とした表情でへたり込む少女を残し、しばらく廊下を進むと、ある部屋に通された。
「ここは旦那様の書斎になります。」
一見何の変哲もない部屋の隅に女性が一人、裸で座り込んでいた。
女性は両手足を切断されていて、脛を縫い合わされていた…。
先程の少女を見た時にも感じた事だが、この館は明らかに異常だ。
狂気の沙汰と言っている程だ。一刻も早く逃げ出したい衝動に
駆られるも拘束された手足はびくともしない。



アヤカさんの前で女性が口を開くと、アヤカさんは女性の口から何かを取り出し、机の上に置いた。それは総入れ歯だった。女性は未だに勃起が収まらない僕の性器を啜えこみ、音を立てながらしゃぶり始めた。

じゅるるっ！ぐぽっぐぽっじゅぽっ！

「ハルキ様、この子の口は素晴らしいでしょう？」

特に口交の快感を高める為に歯を全て抜いてあります。

この子は少し前に買い上げたばかりですから、きつと

これからコツを掴んで、より気持ちの良い口交を楽しめるはずです。」

僕はアヤカさんの説明を聞いてる余裕はなく、女性の口内に何度も射精していた。

「こちらは一応ご紹介しておきましょう。」
アヤカさんはそう言って書斎の奥の扉の鍵を開けた。
部屋の中では両手足を切断された男女が激しく
まぐわっていた。

『ママ！ママ！』

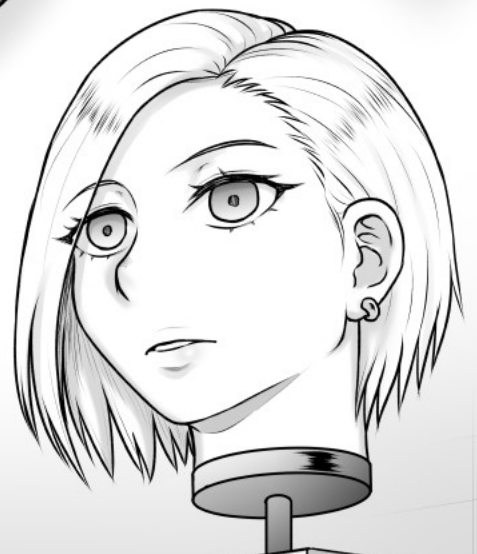
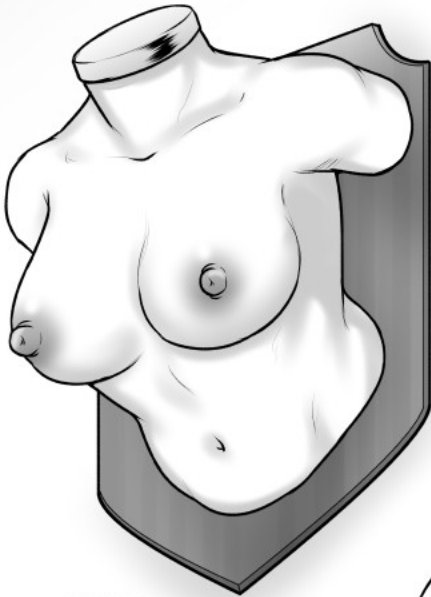
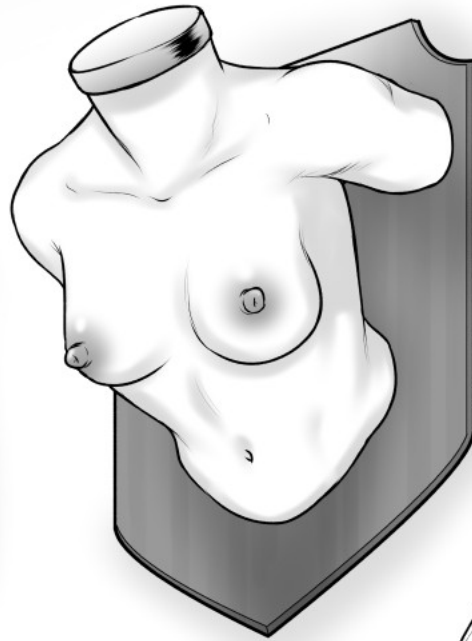
『あ…ああ…。
お願いします…助けて。
この子を止めて…。』

「ここは買い上げた人間を一時的に
保管している部屋になります。

ハルキ様の為に薬を調整する必要が
ありましたので、ハルキ様と似た体格の
息子がいるこの親子を買い上げたんです。」

僕には母親が何を言っているのか
分からなかったが、助けを求めているのは
表情を見れば明らかだった。
アヤカさんは親子を気にする様子もなく扉を閉めた。





書斎を出て再び廊下を進んでいくと、目を疑う様なものが目に入ってきた。女性の頭部と上半身が、まるで動物の剥製の様に飾られていた…。人形でもマネキンでもない…。肌や髪の質感はどう見ても人間のものに違いなかった。

「旦那様は腕の良い剥製職人と知り合いでして、役目を終えた人間の中でも特に気に入っていた者を剥製にして貰っておりました。」

僕の祖父は一体何者だったのだろうか…。この館でどれだけの惨劇が繰り返されてきたのだろうか…。

今、分かっているのは祖父の死後もこの館の惨劇は続いていると言う事実だ…。

「ハルキ様、彼女達を使ってみますか？体はすぐに下ろすのは難しいですが、頭部なら大丈夫ですよ。」

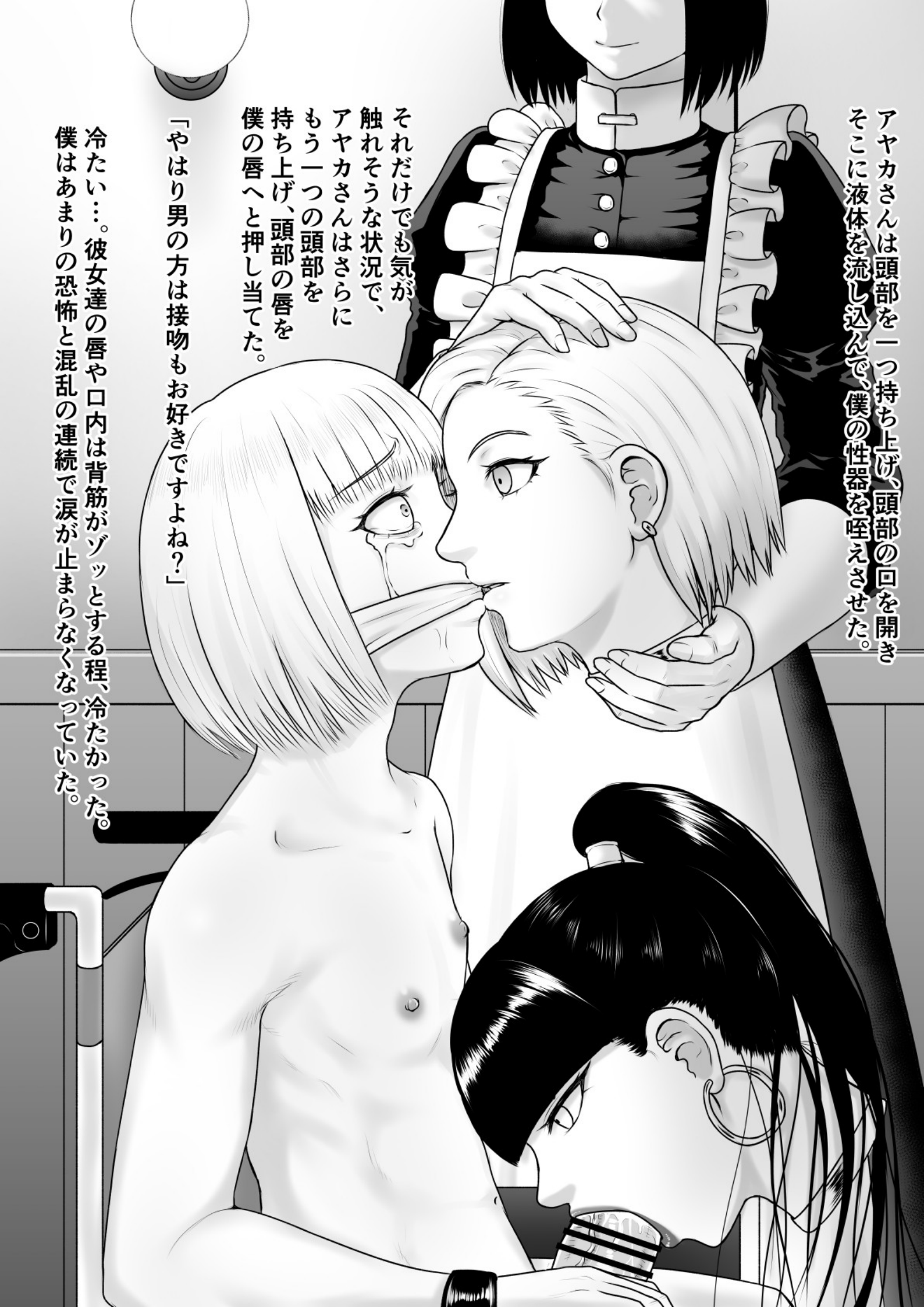
僕はアヤカさんの発言に耳を疑った。

アヤカさんは頭部を一つ持ち上げ、頭部の回を開きそこに液体を流し込んで、僕の性器を咥えさせた。

それだけでも気が触れそうな状況で、アヤカさんはさらにもう一つの頭部を持ち上げ、頭部の唇を僕の唇へと押し当てた。

「やはり男の方は接吻もお好きですよね？」

冷たい……。彼女達の唇や口内は背筋がゾツとする程、冷たかった。僕はあまりの恐怖と混乱の連続で涙が止まらなくなっていた。



剥製が置かれた廊下を曲がると鉄製の扉が
並んでいる廊下が続いていた。

「ここは防音室になっております。」
扉が開いた瞬間、僕の耳に響いたのは女性の絶叫だった。

『ひぎゃあああああっ!!』

『あっ!!あっ!!
がっ...!!
ああああ
あああっ!!』

拷問器具を体に取り付けられた女性が
あらん限りの声を上げていた。

「旦那様はここを音楽室と呼び、心の安らぐ場としておりました。

今日はハルキ様の為に私が歌声の調整しておきました。」

絶叫を上げる女性の視界に僕は映っていなかった。

失禁で飛び散った尿と血の匂いが部屋には充満していた。

隣の部屋では針だらけの椅子に女性が拘束されていた。
乳房は杭で貫かれ、椅子の下には血溜まりが出来ていた。

『痛い…。痛い…。
お願いだから外して…。
死にたくない…。
お願い…。』

痛みにすすり泣く女性は
縋り付くような顔でこちらを見つめていた。

「彼女は出血量を調整してあります。
また後ほど彼女の死に絶える瞬間の声を
ハルキ様も一緒に鑑賞いたしましょう。」

ここは音楽室なんて程遠い。
拷問部屋以外の何物でもなかった。



防音室から先に進むと廊下の終わりに大きな扉が見えた。

「ここが食堂になります。」

扉が開かれるのと同時に館の玄関で感じたのと

同じ異臭が鼻に漂って来る。

テーブルに乗せられているものを見て、僕は思わず吐きそうになった。

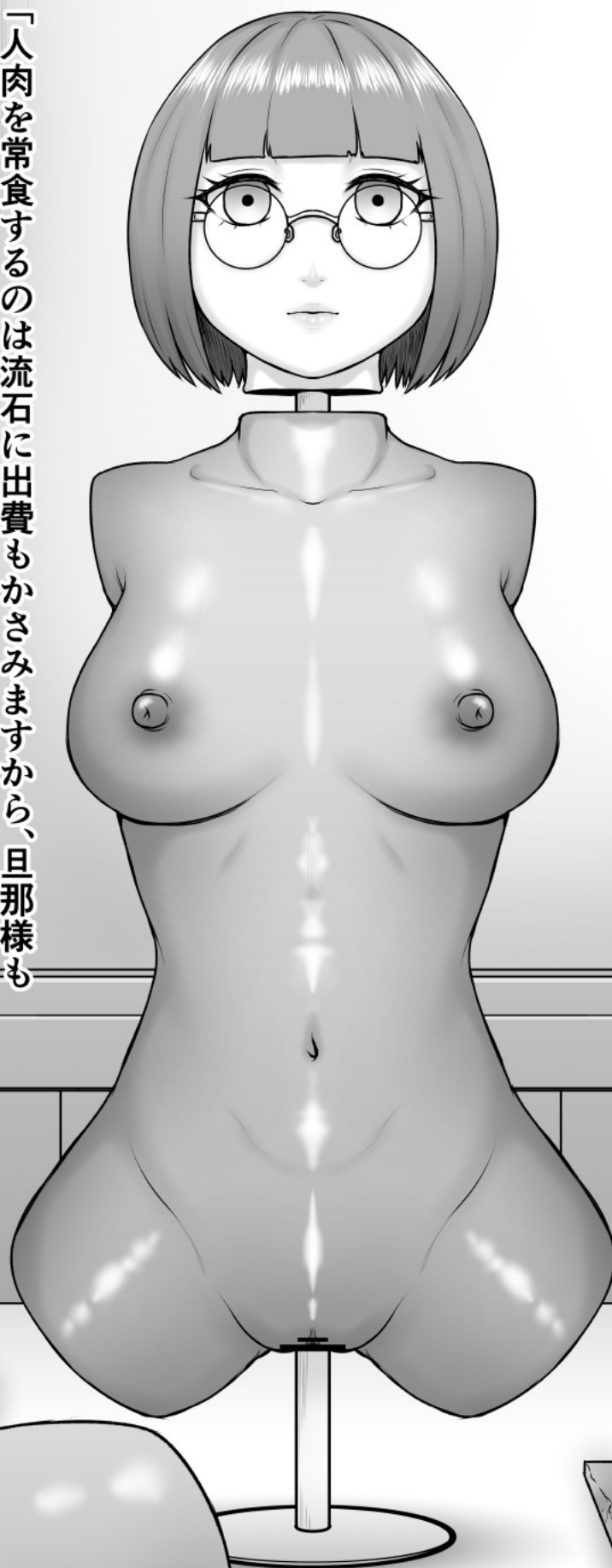
…テーブルの上には調理された女性の体が並べられていた。

「人肉を常食するのは流石に出費もかさみますから、旦那様も特別な日にだけ召し上がっておられました。」

昨日まで都市の街で買い物を楽しんでいたと言う新鮮な女性をハルキ様の為に取り寄せ、調理いたしました。どこか食べてみたい部位などはございますか？」僕は思わず全力で首を横に振った。

「…食欲がないのですか？では、食事は後で楽しみましょう。」

でしたら先にハルキ様に紹介したい人がおりますので、「こちらでお待ち下さい。」アヤカさんは僕を置いて食堂の奥の部屋へ向かっていった。



食堂へ戻ってきたアヤカさんが連れて来たのは、アヤカさんにそっくりな女性だった。

「私の母です。そして旦那様が最も愛していた女性でもあります。」

母は旦那様が亡くなられてから、度々帰らせて等と叫んで錯乱する様になり、この様な形で対処しています。旦那様は母の流す涙がこの世で最も美しい物だとよく仰っていました。

私は母が憎かったです。私がどんなに旦那様の為に身を尽くしても、旦那様の『最愛の存在』にはなれなかった。それなのに母は涙を流しているだけで旦那様から愛される…。

何度母を殺そうと思ったか分かりません。

ですが母が死んだ時に旦那様がどれほど悲しむかを

考えると、母を殺す事など出来ませんでした。」

『うう…うぶうう…。』

「しかし、もう旦那様はおりません。母は旦那様の『最愛の存在』から、私を産んだだけのただの女に戻りました。でも私には『新しい旦那様』であるハルキ様があります。私はやっとな『最愛の存在』になれるのです。」

アヤカさんの話している事の殆どが僕には理解出来なかった。ただ彼女の狂気が真っ直ぐ僕に向けられているのは間違いないかった。

自分の母親を食堂へ残したまま、アヤカさんは先程の食堂の奥の部屋へ僕を連れて行った。部屋にはベッド以外何も置かれてない。車椅子からベッドへ体を移されるも、手足は拘束されたままだった。



「ここは旦那様と母の寝室でした。でも今日からは私とハルキ様の寝室です。ハルキ様は『新しい旦那様』となり、私は『最愛の存在』になるのですから、何の問題ありません。」

「さあハルキ様、先程何度も射精してしまっただけに随分時間も経ちましたからもう一度、注射をいたしますね。これできつと夜明けまで持つはずですよ。」

僕はもう恐怖で動けず、性器に注射針が刺しこまれるのをじっと耐えていた。

注射を打ち終わるとアヤカさんは立ち上がり、服を脱ぎ始めた。

露わになったアヤカさんの体は…、目を覆いたくなるような姿だった。

「ハルキ様…、
いいえ…『旦那様』。」

「さあ…愛し合いましょう。」



「あっ！あっ！
また私の膣内に旦那様の精液が
たくさん出ています！これで7回目です！
気持ち良いのですね！
私の膣内が気持ち良いのですね！
私も気持ち良いです！
旦那様のモノが私の奥まで届いて…！
んっ！ああっ！」

「私の口もお尻も膣も
旦那様の為なら内臓だって
射精の為に使っていただいて構いません！
私の体を旦那様の精液で満たしてください！」



「ああ…泣かないで
ください、旦那様。
不安なのですね？」

「何の心配もいりません。
だって旦那様は私を
愛する以外に何も
考えなくて
よくなるんですから…」

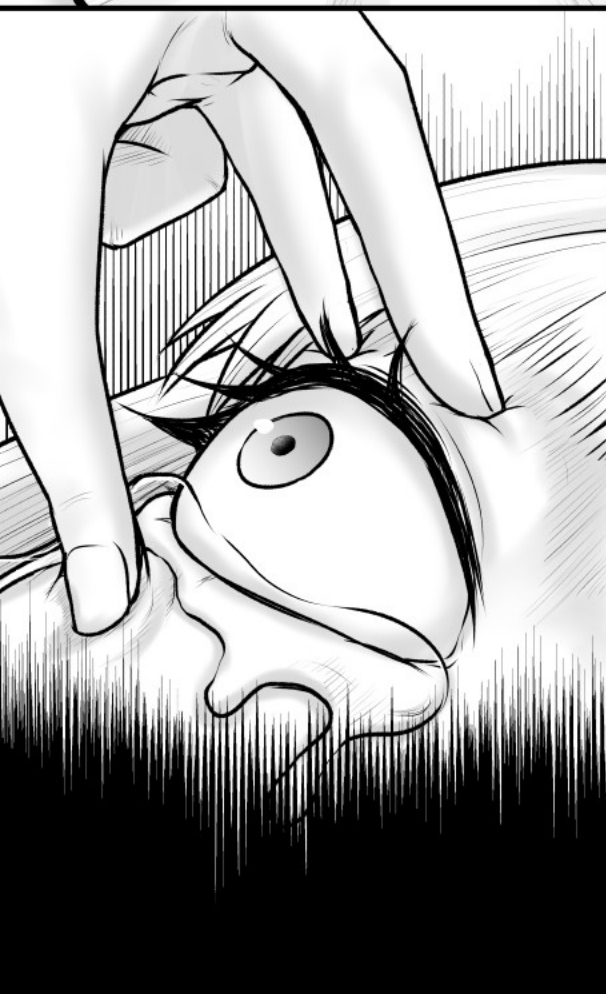
『ooooo~』

「言葉の通りです、
旦那様。」

「何もしなくていいように腕を切り落としましょう。
どこにも行かなくていいように脚を切り落としましょう。
不要な事が見えないように目をくり抜きましょう。
私が旦那様の全てをお世話いたします。だから安心して、私を愛してください…。」

「んっ!?
んんーっ!!」

「暴れないでください。
手元が狂ってしまいます。」



あの夜から一年…。
僕は今も祖父の館で
暮らしている。

僕は…彼女の愛に
溺れてしまった。

「あーあー…
アヤカさん…
僕…もう…」

『さっすよ。』
旦那様のお好きな時に。」

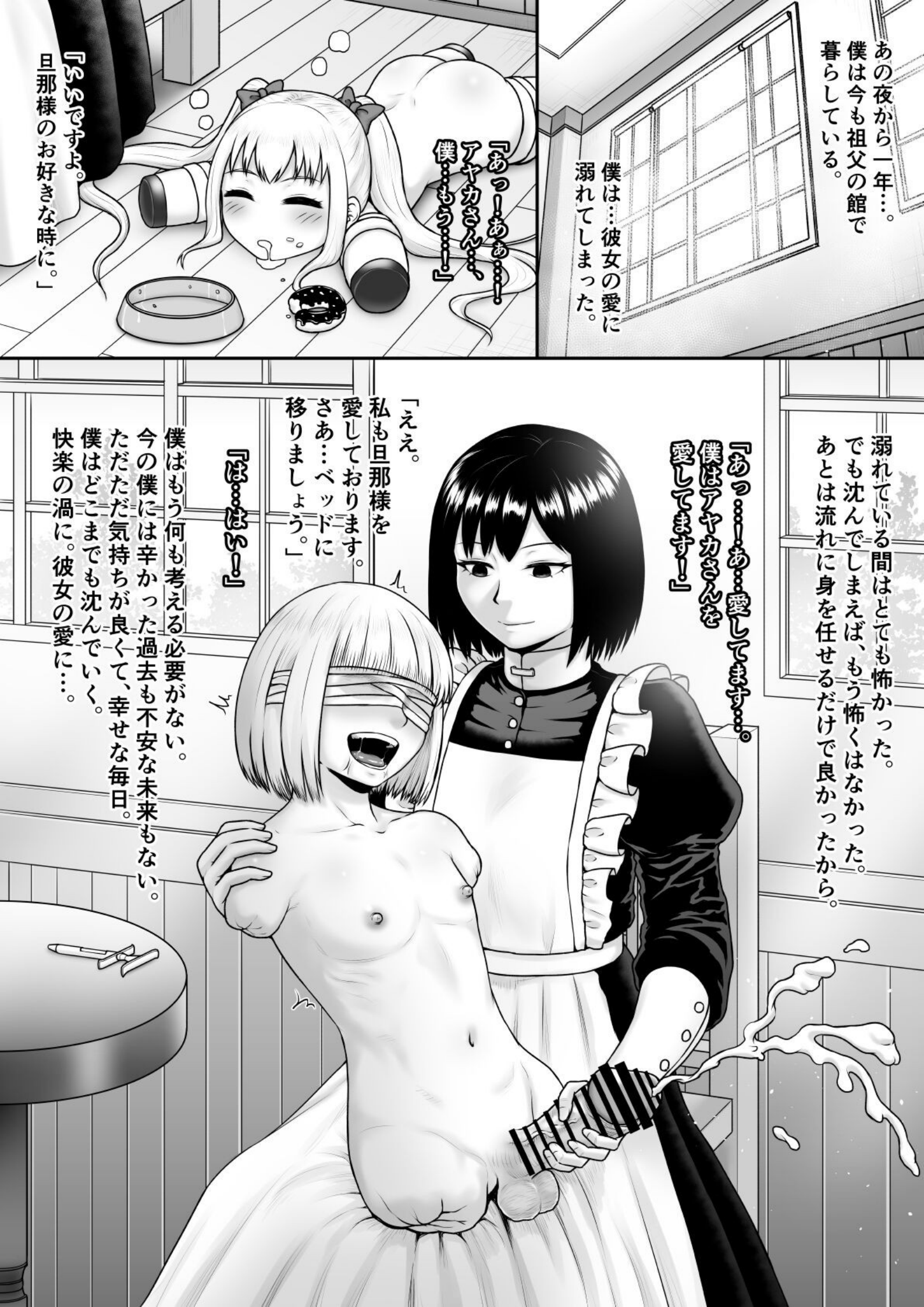
溺れている間はとても怖かった。
でも沈んでしまえば、もう怖くはなかった。
あとは流れに身を任せるだけで良かったから。

「あー…あー…愛しています…。
僕はアヤカさんを
愛しています！」

「ええ。
私も旦那様を
愛しております。
さあ…ベッドに
移りましょう。」

『さっすよ』

僕はもう何も考える必要がない。
今の僕には辛かった過去も不安な未来もない。
ただただ気持ち良くて、幸せな毎日。
僕はどこまでも沈んでいく。
快楽の渦に。彼女の愛に…。



サークル楽園屋の楽と申します。
この度はご購入頂き、誠にありがとうございます。

13作目です。今作では今までと色々違った構成だったり、手法を取り入れての制作だったので不安と楽しみ半々で作業を進めていました。
今回の経験は次回制作に活かしたいと思います。

今作は簡単にまとめれば、究極のかわいそうじゃないと抜けないを体現した老人の不始末が、理不尽な事に罪のない孫に不幸をもたらしたというお話です。
一応過去作の登場人物が関わってはいますが、そちらはリョナ作品ではない為、未読でもそこまで支障がないストーリーになる様に心掛けていましたが、今作単体で読んだ方にも楽しんでいただけたなら幸いです。

絵に関しては、今回ホラー的な要素が強いのでいつも以上に影や空気感を意識して描きました。しかし、まだまだ自分の未熟さに反省するばかりでした。

内容は殆どがリョナ要素を含むものでしたが、モザイク処理の関係で断面や内臓は基本なしにしての制作だったので構図に苦労しました。
振り返ってみるとリョナ作品は結構久しぶりでしたね。
描きたかったものは大体描けたので満足しています。

FANBOXのまとめを除くと今年に入ってから暗い内容の作品が続いたので、次回作は無様エロ系の新規作品を描いて、リフレッシュしたいと思います。

それでは機会があればまた別の作品で。ありがとうございました。

2022年5月20日 楽園屋 楽

Pixiv ID 41315964

FANBOX <https://rakuenya.fanbox.cc/>

Twitter @rakuenya

※違法アップロードは犯罪です。10年以下の懲役もしくは1000万円以下の罰金またはその両方が科せられます。違法アップロードには発信者情報開示請求、損害賠償請求などの法的手段をとらせていただきます。

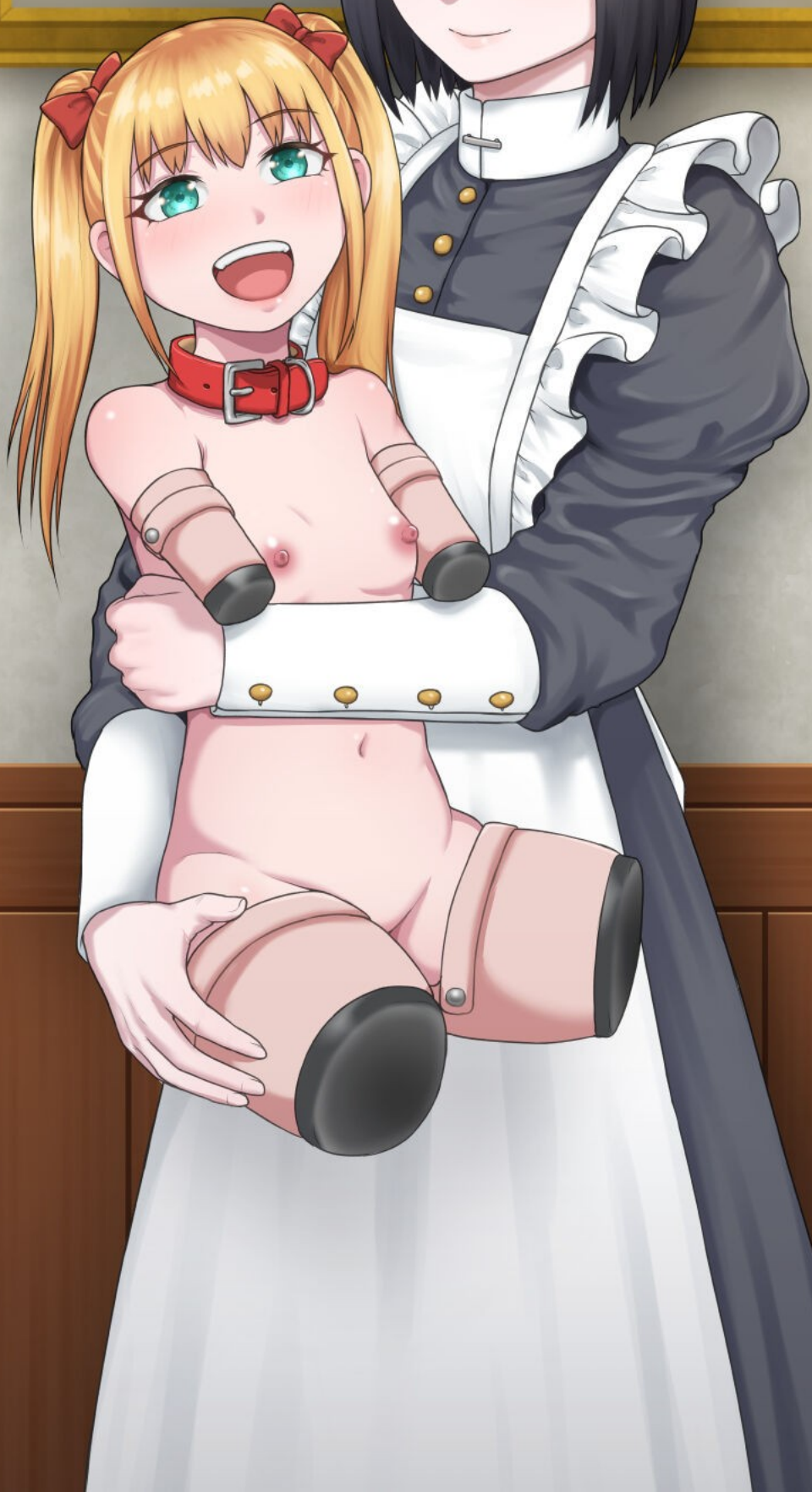
※2020年10月より改正著作権法が施行されました。
リーチサイトの運営、侵害コンテンツへのリンクの掲載も違法となります。
2021年1月より違法にアップロードされた著作物のダウンロードは刑事罰の対象となります。一定の要件の下で私的使用目的でも違法となります。
※本作は有償で提供している作品です。

注意事項！

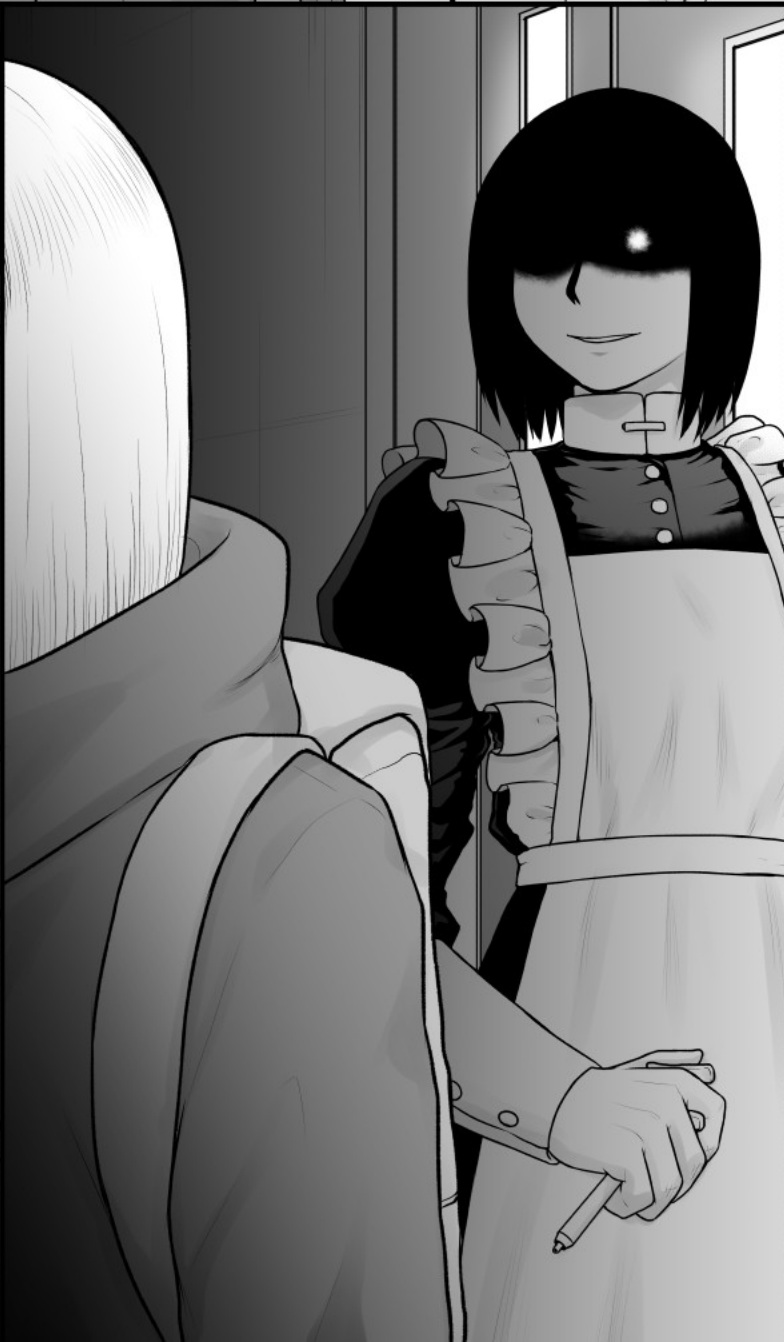
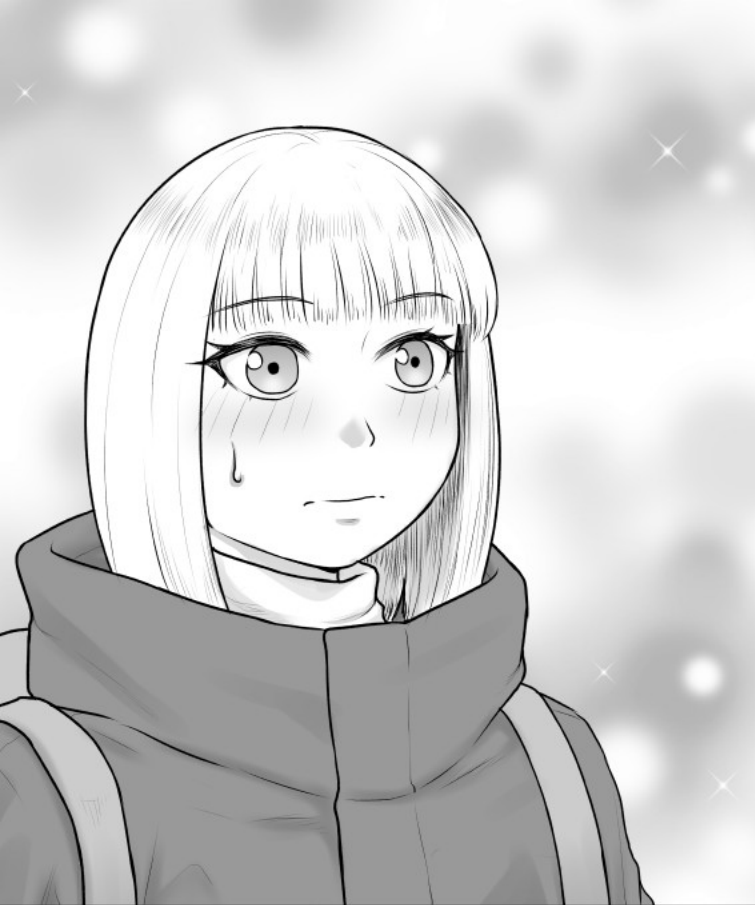
- ・本作品はフィクションです。実在の人物、団体等とは一切関係ありません。
- ・18才未満の閲覧禁止
- ・無断転載・複製・複写・頒布・共有・改変・翻訳を禁じます。
- ・無断転載を行った場合、著作物使用料を請求致します。
- ・本書の内容には犯罪行為の描写がありますが、犯罪行為を推奨するものではなく、実際にこのような行為を行った場合、法律により罰せられます。絶対に真似をしないでください。
- ・違法アップロード等の著作権侵害行為を発見した場合、損害賠償請求、著作権侵害での警察への通報等の対応を取らせて頂く場合があります。

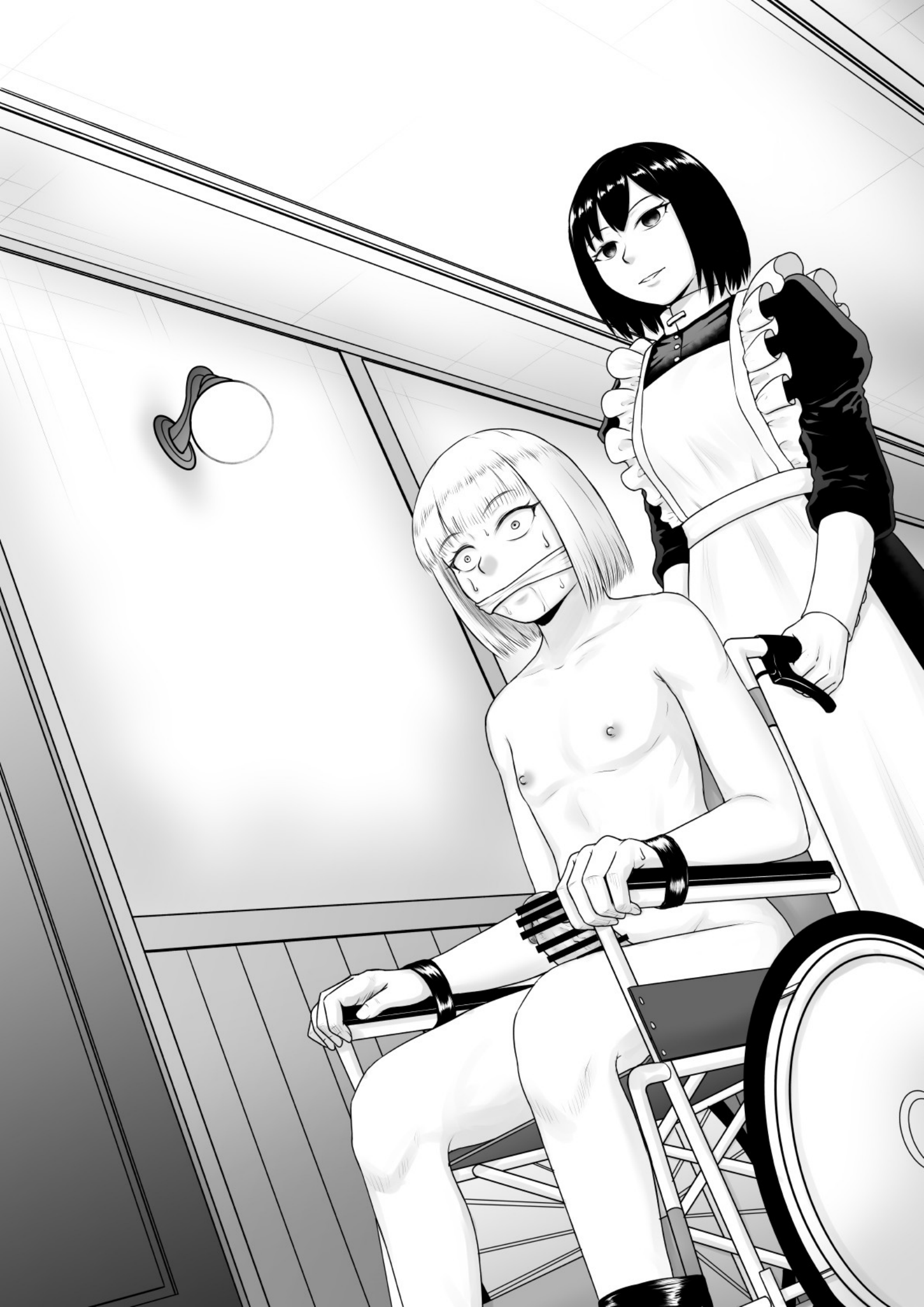
caution

Illegal upload, unauthorized reproduction, duplication, copying, distribution, sharing, modification, and translation are prohibited.









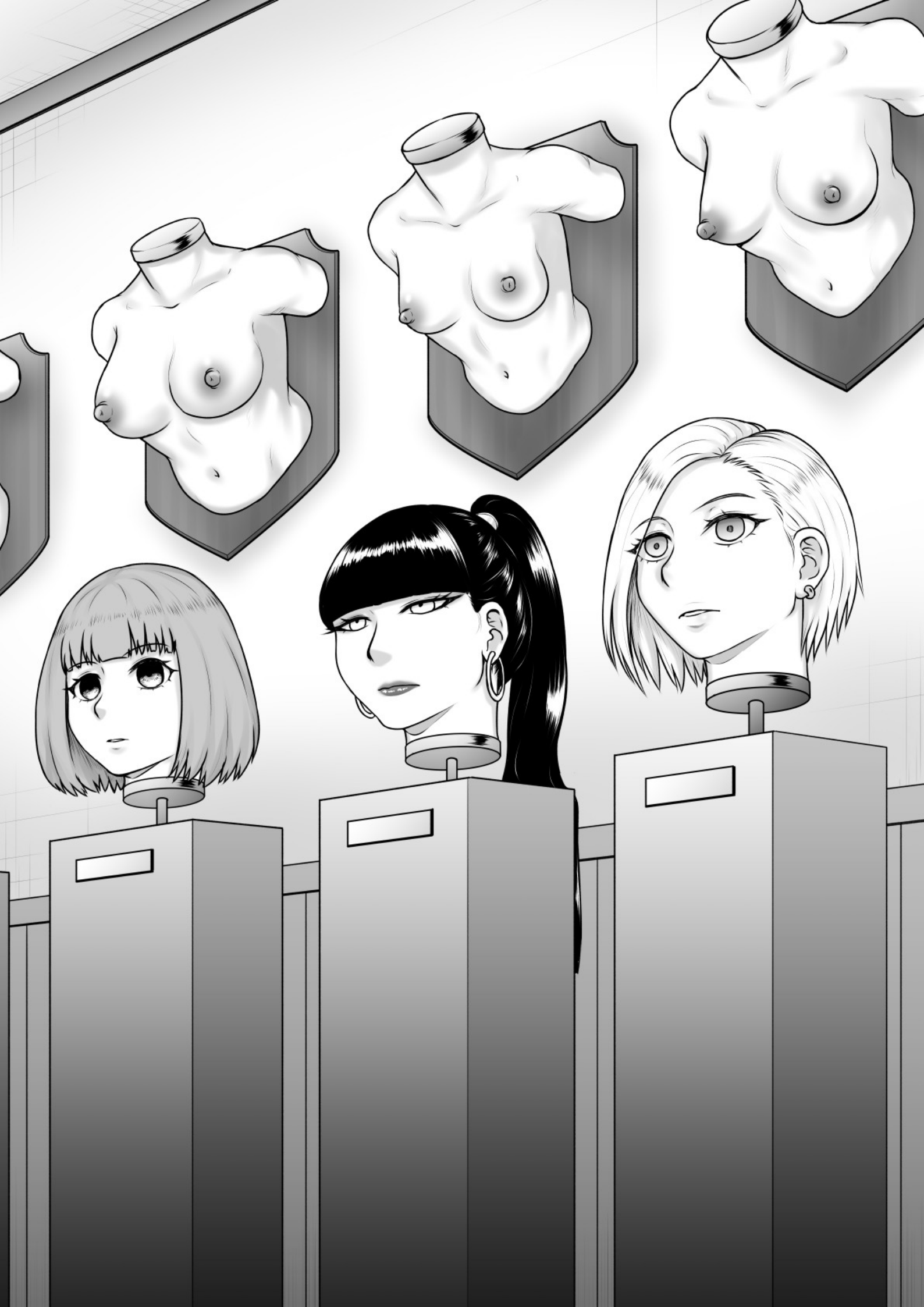


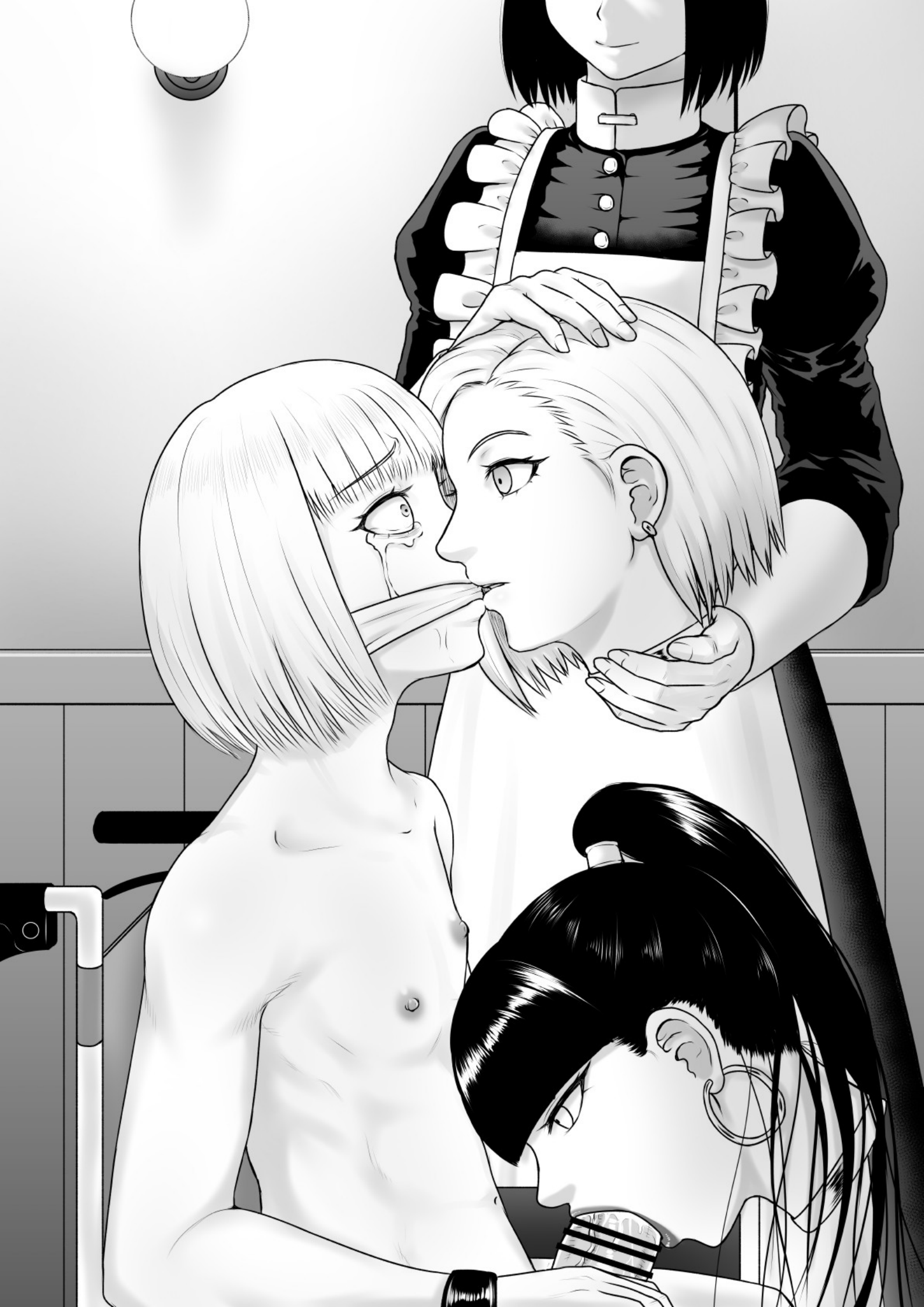






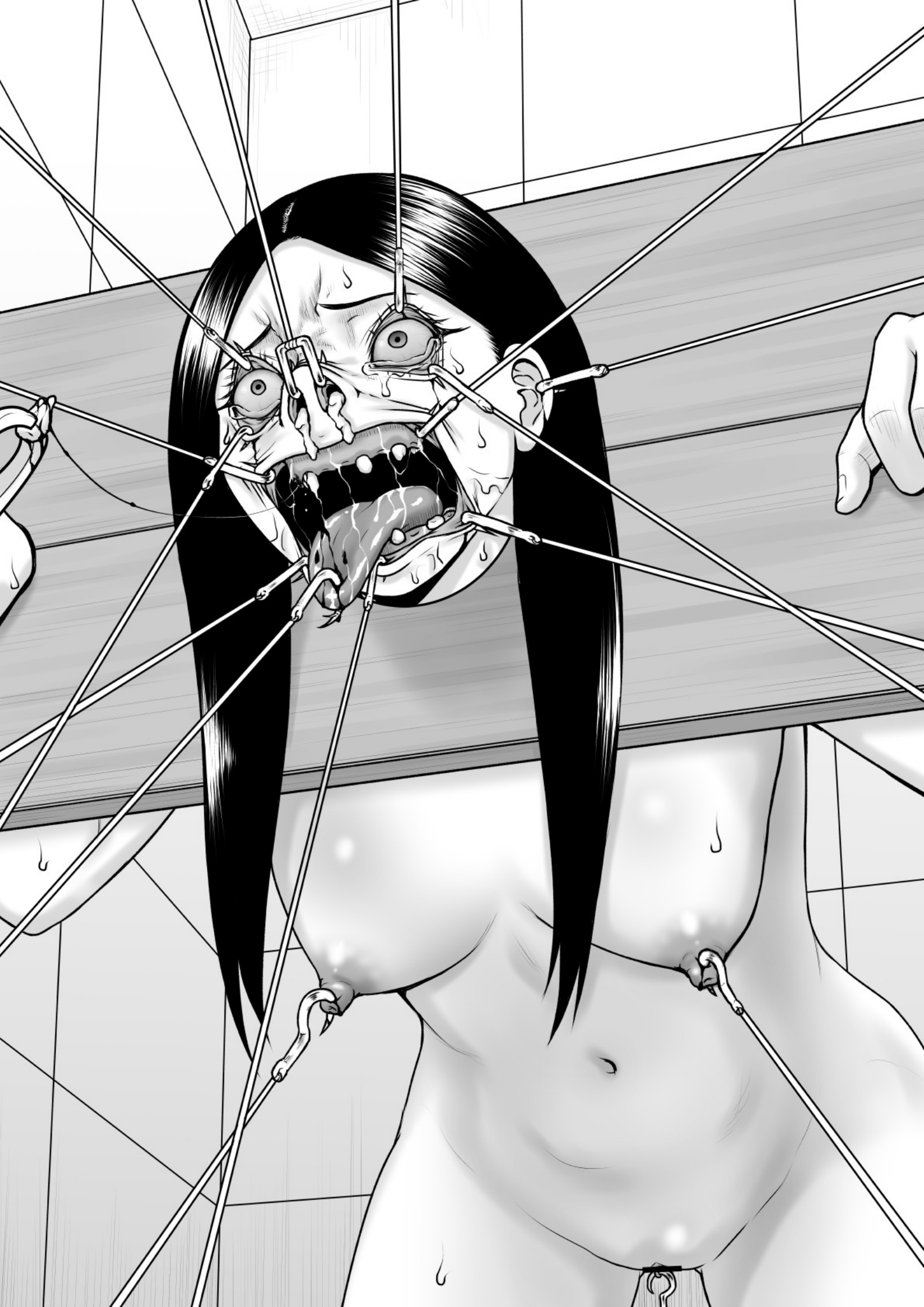


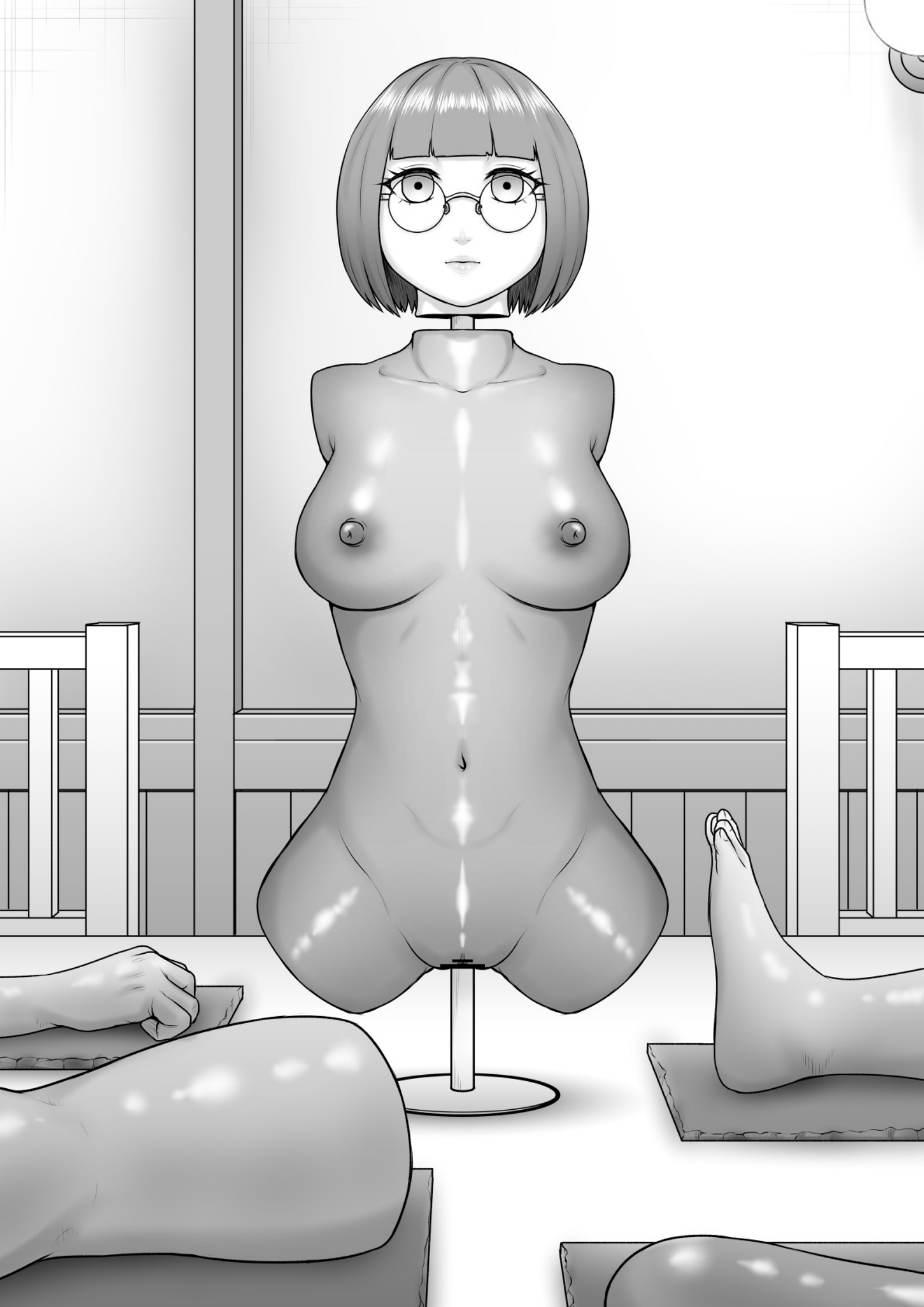


























※違法アップロードは犯罪です。10年以下の懲役もしくは1000万円以下の罰金またはその両方が科せられます。違法アップロードには発信者情報開示請求、損害賠償請求などの法的手段をとらせていただきます。

※2020年10月より改正著作権法が施行されました。
リーチサイトの運営、侵害コンテンツへのリンクの掲載も違法となります。
2021年1月より違法にアップロードされた著作物のダウンロードは刑事罰の対象となります。一定の要件の下で私的使用目的でも違法となります。
※本作は有償で提供している作品です。

注意事項！

- ・本作品はフィクションです。実在の人物、団体等とは一切関係ありません。
- ・18才未満の閲覧禁止
- ・無断転載・複製・複写・頒布・共有・改変・翻訳を禁じます。
- ・無断転載を行った場合、著作物使用料を請求致します。
- ・本書の内容には犯罪行為の描写がありますが、犯罪行為を推奨するものではなく、実際にこの様な行為を行った場合、法律により罰せられます。絶対に真似をしないでください。
- ・違法アップロード等の著作権侵害行為を発見した場合、損害賠償請求、著作権侵害での警察への通報等の対応を取らせて頂く場合があります。

caution

Illegal upload, unauthorized reproduction, duplication, copying, distribution, sharing, modification, and translation are prohibited.